

De Docta Ignorantia における万物の展開と 包含とについて

—その数学的な考察に見られる神と被造物とのあいだの無限な上昇下降関係—

大 出 哲

S. Augustinus や Boetius のような中世の偉大な哲学者たちを支配した『智恵の書』のあの句 *«omnia in mensura, et numero, et pondere disposuisti. XI, 21»* は、やはり Nicolaus de Cusa にも支配的である。神は、算数学、幾何学、音楽および天文学を同時に使用して、その知性のうちに、創造さるべき諸事物の比関係を定め、これにしたがって万物を創造した、⁽¹⁾そのけっか、われわれにはとうてい把握しつくすことのできないほどの驚歎すべき比関係——神の知性のうちに神の知性それ自体として現存する表現されえない比関係——を縮限 (*contrahere*) している諸事物の統一、すなわち、宇宙が構築された。こうした比関係を、われわれの知性は、諸事物から引き出して諸事物の外すなわち知性のうちに存在させ、「外的な符徴 (*externae notae*) 』, 6; 81,9」によって表現する。ここに比関係の三つの存在様式が見られるが、われわれは、それを事物との関係においてつぎのように名付けることにする。

- (1) 神の知性のうちに神の知性それ自体として現存する比関係を *proportiones ante rem* と、
- (2) 事物のうちに縮限されて内在している比関係を *prop. in re* と、
- (3) 事物から引き出されて知性のうちに存在する比関係を *prop. post rem* と。

prop. in re は *prop. post rem* の原型であり、*prop. ante rem* は *prop.*

in re の原型である。ところで、prop. ante rem は、prop. in re の媒介によって prop. post rem となる以前にも、いわば生得的なものとしてわれわれの知性のうちに縮限されて知性それ自体となっている。なぜなら、「知性は、すでに知性のうちに縮限された仕方では知性それ自体となっていないものを何も知解しえないからである。Ⅱ, 6; 81, 10~11」人間の知性は、prop. ante rem の縮限なのであり、その事物との連関における展開が prop. post rem なのである。それゆえ、神の知性の prop. in re への展開と人間の知性の prop. post rem への展開とのあいだには、或る類似が存しなければならない。しいて数式に似せて表わせば、

$$\frac{\text{神の知性 (prop. ante rem)}}{\text{prop. in re}} = \frac{\text{人間の知性 (prop. ante rem の縮限)}}{\text{prop. post rem}}$$

となろう。この類似によって、われわれは、人間の知性と prop. post rem との関係から、神の知性と prop. in re との関係——「神は万物を包含するものであり、万物を展開するものである。Ⅱ, 3; 70, 14~16」——を知解することができる。

ところで、数は、比関係の一つであるがゆえに、上述の「比関係の三つの存在様式」にしたがって、(1) 神の知性のうちに神の知性それ自体として存在し—— numerus ante rem ——, (2) 事物のうちに内在して事物と同じ存在をもっており—— numerus in re ——, (3) 事物から引き出されて知性のうちに存在する—— numerus post rem ——, そして、これらのあいだには、つぎのような比関係が存するはずである。

$$\frac{\text{神の知性 (n. a. r.)}}{\text{n. i. r.}} = \frac{\text{人間の知性}}{\text{n. p. r.}}$$

この比関係の右辺から左辺への上昇を、Nicolaus de Cusa はつぎのように言う。「われわれの精神から数が生まれ出るように、そのように、事物の多性は、神の精神から生まれ出るのである。Ⅱ, 3; 70, 19~22」と。われわれは、まず、右辺のどのようにして人間の知性から n. p. r. が展開するか を考察し、つぎに、それとの類比によって、左辺の どのようにして

て神の知性から事物 (n. i. r.) が展開するか を考察しよう。

(1) どのようにして人間の知性から n. p. r. が展開するか。

Nicolaus de Cusa によれば、宇宙は有限個の個物から成っている、つまり、n. i. r. は有限である。なぜなら、n. i. r. が無限であるならば、宇宙は無限な諸部分から成っておらねばならず、そのときには、事物の区別、秩序、比、調和、さらに、存在するものどもの多性自体もなくなってしまうからである。この見地に立って、いま、n. p. r. を上昇させよう。n. p. r. と対応するかぎりでは、n. p. r. は「最大なもの (maximum) [5 ; 12, 10] に必ず現実にいきつく。ところで、n. p. r. は、n. i. r. と対応するかぎりにおいて現実に到達した「最大なもの」よりもさらに上昇する可能性をもっている。⁽⁵⁾それゆえ、現実に到達した「最大なもの」は、n. i. r. と対応するかぎりでの「最大なもの」ではあるが、「それよりも大きな数 (n. p. r.) が存在しえないような最大なもの」ではない。⁽⁷⁾つぎにわれわれは、n. p. r. を n. i. r. との対応を超えて無限に上昇させよう。いくら上昇させたとしても、それは、或る任意の n. p. r. よりも大きな n. p. r. にすぎず、「無限なもの」へと移行することはできない。⁽⁸⁾なぜなら、もしそのことが可能であるならば、n. p. r. は「無限なもの」と一体となり、n. p. r. はもはや数ではなくなるであろうからである。数の上昇の場合には、「最大なもの」は 有限不確定的なもの —— 1 からつぎの 2 に、2 からつぎの 3 に、3 からつぎの 4 にいたる、という有限個を数える確定的な体験を、このようにして という不確定的なものを媒介として無制限に拡張することによって得られる概念——にすぎないのである。それゆえ、われわれは、n. p. r. の上昇において「それよりも大きな数 (n. p. r.) が存在しえないような最大なもの」に到達することを断念しなければならない。

つぎに、n. p. r. を下降させよう。この場合は、上昇の場合と事情が異なる。n. p. r. は、n. i. r. と対応するかぎりでは必ず現実に「最少なもの」にいきつくが、上昇の場合とちがって、n. i. r. との対応を超えて、現

実に到達した「最小なもの」よりも下降する可能性をもたない。したがって、「最小なもの」は、「それよりも小さなものが存在しえないような最小なもの」である。われわれは、現実においても可能態においても「最小なもの」から下降することはできない。

数においては、『それよりも小さなものが存在しえないような最小なもの』、いわば、一性 (unitas) に到達しようということは、必然である。I, 5; 12, 19~20」

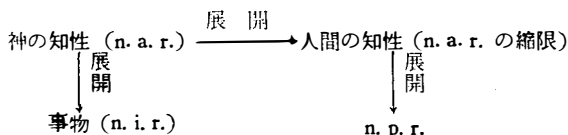
この引用における「一性」が、「最小なもの」である。

だがはたして、この「一性」は数であろうか。Nicolaus de Cusa は、「一性は数でありえない」と考える。というのは、数は、⁽⁹⁾超えるものを許すので、⁽¹⁰⁾けって「端的に最小なもの」でありえないからである。一性は「あらゆる数の始め (principium omnis numeri) I, 5; 12, 24」なのである。数は、確定的なものである一性から始まり、上昇して、不確定的なものである「最大なもの」に到達する。だが、数の「終り (finis)」は不確定的なものであることはできない、とかれは考える。そこでかれは、「最小なものは最大なものと一致する⁽¹¹⁾」という根本命題を持ち出して、数の「終り」すなわち「それよりも大きなものが存しえないような最大なもの」を確定的なものとして把握する。

「一性にたいしてはより小さなものは存在しえないがゆえに、一性は『端的に最小なもの』であることになろう、そして、これと『最大なもの』とは……一致するのである。I, 5; 12, 20~21」

一性こそは、「最小なもの」であると同時に「最大なもの」である。すなわち、「無限なもの」である。「一性は、『最小なもの』であるがゆえに、あらゆる数の『始め (principium)』であり、また、『最大なもの』であるがゆえに、あらゆる数の『終り (finis)』である。I, 5; 12, 24~25」こうして、数は、「始め」と「終り」とのあいだに、すなわち、「無限なもの」である一性のうちに包含される。この意味において、「一性は数の包含 (complicatio) である。II, 3; 69, 11」

一性(数の原理)は、このようにして到達される以前にも、いわば生得的なものとしてわれわれの知性のうちに縮限されて知性それ自体となっていたのである。なぜなら、さきに述べたように、「知性は、すでに知性のうちで縮限された仕方では知性それ自体となっていないものを何ものも知解しえないからである。Ⅱ, 6; 81, 10~11」人間の知性のうちに縮限されて知性それ自体となっている一性(数の原理)は、「共通な一なもの(unum commune)Ⅱ, 3; 70, 20」と呼ばれている。われわれは、おのこの事物を「共通な一なもの」との関連において「一なもの」として把え、それから数を得る。この意味において、「数は、『共通な一なもの』の精神による多重化(multiplicatio)である。Ⅱ, 3; 71, 2」と言われる。ところで、一性(数の原理)は、神の絶対的な一性から無限に下降して人間の知性のうちに縮限されておりながらも、絶対的な一性のうちに包含されているものである。それゆえ、「われわれは、上方に向かって数えようと下方へ向かって数えようと、いずれにせよ、神であるところの絶対的な一性から、すなわち、万物の原理から開始する。Ⅲ, 1; 121, 27~122, 2」ことになるのである。したがって、n. p. r. は、神の絶対的な一性(神の知性)が、その縮限である「共通な一なもの(人間の知性)」を介して事物との関連において展開したものである、と言える。ところで、事物(n. i. r.)は、信仰の所与によれば、神の知性(n. a. r.)の展開である。ここにつきのような下降-展開の図式が得られる。



人間の知性の n. p. r. への展開と神の知性の事物(n. i. r.)への展開とのあいだに存するこの類比によって、Nicolaus de Cusa は、人間の知性の n. p. r. への展開の仕方から、神の知性の事物(n. i. r.)への展開の仕方を知解する。これがつぎの考察である。

(2) どのようにして神の知性から事物 (n. i. r.) が展開するか。

『出エジプト記』のあの有名な句 **«Ego sum, qui sum. III, 14»** が示すように、神は、存在するものそれ自体である。また、「存在するもの(ens)と一なもの(unum)とは置き換えられ、II, 7; 83, 1」さらに、存在するものと善なものとも置き換えられるがゆえに、神は一なものそれ自体——絶対的な一なもの——であり、善なものそれ自体——絶対的な善なもの——である。さらに、「神の意志は全能な原因であり、意志と全能とはかれの存在である。II, 3, 72, 9~10」この全能と意志とにより、神が全く自由に無から自分とは別な存在をつくり出すことが創造である。そのけっか、もろもろの存在するものは、原因である善なものそれ自体と類似して、存しうるかぎりのいちばん良い在り方で存在することとなった⁽¹⁴⁾。「結果は、それがよってもって存在するとおりのものであるところの起源と根拠とに、できるだけ近くできるだけ類似するように伴ない起るものである。II, prolog. ; 60, 6」からである。同じ理由で、もろもろの存在するものは、絶対的な一なものにできるだけ近くできるだけ類似するように、或る一なものを形成しなければならない。こうした一なものは、一方は、絶対的な無限なものである神にできるだけ近くできるだけ類似するために或る種の無限性をもたなければならないし、他方では、絶対的な無限なものである神とは別なものであるがゆえに、有限性をもたなければならない。有限性によって縮限されているがゆえに、この一なものの無限性は「縮限された無限性 (infinitas contracta)」であり、縮限された無限性をもつがゆえに、この一なものは「縮限された一なもの(unum contractum)」である。「縮限された一なもの」とは、「世界すなわち宇宙 (mundus sive universum) II, 4; 73, 14」のことである。ところで、それは有限性によって縮限されていた。したがって、それは諸部分をもたねばならぬ。

「宇宙は、縮限されたものであるがゆえに、その諸部分なしには、一でも全体でも完全でもありえない。II, 4; 75, 1~2」

諸部分とは諸事物のことである。諸事物はつぎのようにして存在へと進み出た。

時間の秩序によれば、「宇宙の諸部分であるところの存在するものどもはすべて、宇宙と同時に存在へと進み出た。Ⅱ, 4; 74, 28~75, 2」だが、この同時的な進出は、段階的な縮限によって秩序づけられていた。これを、かれは、数の展開との類似によってつぎのように説明する。

(1) 「第一の一性⁽¹⁵⁾(*prima unitas*) Ⅱ, 6; 79, 5」から数の原理(縮限された一性が下降するように、「第一の一性」から「第二の一性⁽¹⁶⁾ (*secunda unitas*) Ⅱ, 6; 79, 6」すなわち「第一の縮限された一性 (*prima contracta unitas*) Ⅱ, 6; 79, 21」が下降する。この「第二の一性」を、かれは「もろもろの普遍(類と種)の根 (*radix universorum*) Ⅱ, 6; 79, 15」いわば「十の最も類的なものの総体 (*decem generalissimorum universitas*) Ⅱ, 6; 80, 1」であると考え、「普遍(宇宙)の十的な一性 (*unitas universi denaria*) Ⅱ, 6; 79, 11」とも呼んでいる。

(2) 「第二の一性」から「第三の一性 (*unitas tertia*) Ⅱ, 6; 79, 16」すなわち「第二の縮限された一性 (*secunda contracta unitas*) Ⅱ, 6; 79, 24」が展開する。この「第三の一性」は、「第二の一性」を「十」とすれば、その平方数すなわち「百」として生じるがゆえに、「普遍(宇宙)の百的な一性 (*unitas universi centenaria*) Ⅱ, 6; 79, 17」とも呼ばれる、そしてこの段階においては、普遍(宇宙)はいわば「類(*genera*) Ⅱ, 6; 80, 2」である。

(3) 「第三の一性」から「最後のすなわち第四の一性 (*unitas ultima sive quarta*) Ⅱ, 6; 79, 16」すなわち「第三の縮限された一性すなわち最後の普遍的な一性 (*tertia contracta quae est ultima universalis unitas*) Ⅱ, 6; 79, 25」が展開する。この「第四の一性」は、「第二の一性」を「十」とすれば、その立方数すなわち「千」として生じるがゆえに、「普遍の千的な一性 (*unitas universi millenaria*) Ⅱ, 6; 79, 18」とも呼ばれる、そして、この段階においては、普遍(宇宙)はいわば「種 (*species*) Ⅱ, 6; 80, 2」で

ある。

(4) 「第四の一性」から「三つの普遍的なもの(「十の最も類的なものの総体」「類」「種」)を現実には縮限しているところの事物(res quae actu ipsa contrahit) Ⅲ, 6; 80, 3~4」すなわち「個物(individua) Ⅲ, 6; 80, 6」⁽¹⁹⁾が展開する。この秩序を、かれは「自然の秩序(ordō naturae) Ⅲ, 6; 80, 12」と呼んでいる。これにたいして「完全性の秩序(ordō perfectionis) Ⅲ, 3; 129, 11」と言われるものがある。これによれば、自然の秩序における第一の一性すなわち絶対的な一性と第二の一性すなわち普遍(宇宙)とのあいだに或る媒介が介入してくる。

⁽²⁰⁾ 第一に、創造主としての神が存在する。

第二に、「万物の存在の相等性(神)と基本的にもペルソナ的にも合一したところの、万物の普遍的な縮限(universalis rerum omnium contractio aequalitati omnia essendi hypostatice ac personaliter unita) Ⅲ, 3; 129, 4~5」——「被造物でもあるという仕方で神であり、創造主でもあるという仕方で被造物である(ita Deus est ut sit et creatura, ita creatura ut sit et creator.) Ⅲ, 2; 125, 15~16」ところのもの、すなわち、神であり万物であるもの——が存在する。ところで、「万物であるもの」となりうるものは、人間をおいてはほかに見出されえない。なぜなら、人間は、上位の本性(天使)と下位の本性(無機物、動植物)とをそれ自身の内部に包含するがゆえに、「小宇宙(microcosmos) Ⅲ, 3; 127, 2」であり、これが神と合一した場合、宇宙と個々のものとのもつあらゆる完全性の充実として現存するであろうからである。⁽²¹⁾ それゆえ、「神であり万物であるもの」は、「神であって人間であるもの(神人)(Deus et homo) Ⅲ, 3; 129, 3」である。これが、神によって意図された創造さるべき宇宙の原型すなわち万物の「発出の始源(principium emanationis) Ⅲ, 3; 127, 20」—— Verbum⁽²²⁾——として、あらゆる事物よりも先に神のもとに現存していたのである。

第三に、万物は、Verbumによって、縮限された存在へと進み出て、神

の意図を実現すべく進展する。

そこで、絶対的な一性と普遍(宇宙)とのあいだの或る媒介とは Verbum のことである。Verbum は、創造にさいして、絶対的な一性と被造物との媒介であったように、やがて神と被造物との「仲保者 (mediator) Ⅲ, 6; 137, 12」として受肉し、被造物の「復帰の究極目的 (finis reductionis) Ⅲ, 3; 127, 20」となった, そして, 世の終りには, ふたたび両者の媒介となって, 被造物を絶対的な一性に包含させるのである。

「自然の秩序」によれば, 「三つの普遍的なもの」は, 「個物の前に現存している。(ante rem existunt) Ⅱ, 6; 80, 3~4」もちろんこれは, 普遍的なものが個物に先立ってそれ自身において自存するという, プラトンの実念論ではない。「三つの普遍的なもの」は, それ自身において自存するのではなくて, 個物において自存し, このかぎりにおいて「個別的なものによって縮限されうる普遍的な或る存在 (quoddam esse universale, contrahibile per singulare) Ⅱ, 6; 80, 12~13⁽²³⁾」をもっているのである。つまり, 普遍的なものは, 個物の本質規定として, 個物と同等の存在をもっているのである。

「個別的なものだけが現実存在しており, このうちで, 普遍的(宇宙的)なものは縮限された仕方では個物的なものそれ自体である。Ⅱ, 6; 80, 10~11」「宇宙は, どんな事物のうちでも, 縮限された仕方では, 宇宙の縮限されたあり方の本質をなすもの(個物の本質)である。Ⅱ, 5; 77, 3~4」

したがって, この立場は, 個物だけが真の实在であって普遍的なものはわれわれのたんなる思惟の所産にすぎないという唯名論的な立場でもない。じっさい, かれは唯名論的な立場を否定している。

「普遍的なものどもは, 個別的なものどもの外には現実に見出されないとはいえ, たんに理性によって存在するものではない。Ⅱ, 6; 800, 17~19」

ところで, 絶対的な一性から下降して「三つの普遍的なもの」が順次に展開し, さらに個物が展開するということは, 絶対的な一性が, 縮小され

て(minorari)、有限で縮限されたものへと連続的に移行することではなく⁽²⁴⁾て、創造の意図によってすでに神の知性のうちに神自体として存在していたところの、**類種関係による創造さるべき事物の統一**——神でもあり縮限された最大なもの(宇宙)でもあるところのもの、すなわち **Verbum** ——が、創造と同時に無限に下降して事物の本質規定として事物と同等の存在をえることである。このように、事物のうちにその本質規定として存在している普遍的なものを、われわれは知性の働きによって事物の外すなわち知性のうちに存在せしめる⁽²⁵⁾。神の知性のうちに存在する普遍、事物のうちに存在する普遍、および、人間の知性のうちに存在する普遍という三つの存在様式は、周知のように、**Abaelardus** 的な実念論である。

ともあれ、宇宙は、一性(数の原理)が一性の展開である数のうちに見出されるように、すべての事物の縮限された原理として、すべての事物のうち⁽²⁶⁾に存在する、つまり、万物の「縮限された何性(**quidditas**)である。Ⅱ, 4; 74, 17」ところで、「絶対的な最大なものは、縮限された仕方**で**万物であるところのもの(宇宙)のうちに、絶対的に存在する、Ⅱ, 4; 75, 10~11」つまり、「神は宇宙の絶対的な何性である。Ⅱ, 4; 75, 11~12」それゆえ、神は、普遍(宇宙)の三つの縮限の段階を介して、個物のうちにその**絶対的な何性**として見出される。

「万物の絶対的な存在性すなわち絶対的な何性であるところのものは神自身である。Ⅱ, 4; 74, 13~14」

だが、このことは、神が事物それ自体たとえば太陽それ自体あるいは月それ自体として見出される、ということではない。「絶対的な何性は、事物それ自体ではない。Ⅱ, 4; 74, 15~16」のである。では、神が個物のうちにその絶対的な何性として見出されるということは、いったいどういうことであろうか。上の引用(Ⅱ, 4; 74, 13~14)から明らかなように、**神がおのおのの事物のなかにそれを存在せしめるもの(絶対的な存在性)**として見出されることである。それゆえ、このかぎりでは、万物は、存在根

楔を同一とする ens であるにすぎない。では、事物の相異性は何に存するのであろうか。それは、事物の絶対的な何性に存するのではなくて、事物の縮限された何性に存するのである。

「太陽の絶対的な何性は月の絶対的な何性とは別なものではない……、だが、太陽の縮限された何性は月の縮限された何性とは別である。II, 4; 74, 12~13」

事物の縮限された何性とは、事物の本質規定として事物それ自体と同等の存在をもつ何性のことである。それは、万物の縮限された何性である宇宙が別々な仕方でも縮限されることによって生じる。

「宇宙は縮限された何性であり、この何性は太陽のうちと月のうちとでそれぞれ別々な仕方でも縮限されているがゆえに、このことから、宇宙の同一性は、一性が多性において存在するように、相異性において存在する。II, 4; 74, 16~19」

ところで、万物の縮限された何性である宇宙は、「万物の存在の相等性(神)と基体的にもペルソナ的にも合一したところの、万物の普遍的な縮限」すなわち Verbum が、無限に下降し縮限されて生じたものである。それゆえ、事物の縮限された何性は「Verbum すなわち『まったく絶対的な普遍的なもの』→『縮限された普遍(宇宙)』としての『万物の縮限された何性』→『類』としての『事物の縮限された何性』→『種』としての『事物の縮限された何性』→『事物の縮限された何性(事物の本質規定)』』という下降によって生じるのである。

さて、Nicolaus de Cusa によれば、具体的な事物は三位一体の足跡である。というのは、神が、「永遠な一性(aeterna unitas) II, 7; 82, 22」(御父)と「一性との相等性(aequalitas unitatis) II, 7; 82, 24」(御子すなわち Verbum)と「無限な結合である聖霊(Spiritus sanctus, qui est nexus infinitus) II, 7; 83, 18」との三位一体として把捉されるように、具体的な事物は、

(1) 神のうちに神として存在する「絶対的な可能性⁽²⁷⁾(possibilitas absoluta)」が無限に下降し縮限された「質料(materia) II, 7; 83, 7」

(2) 御子すなわち *Verbum* が無限に下降し縮限された「形相 (*forma*)」
 Ⅱ, 7; 83, 7」

(3) 「無限な結合である聖霊」が無限に下降し縮限された「質料と形相との結合 (*nexus materiae et formae*)」Ⅱ, 7; 83, 12」

という三つのものの統一として把捉されるからである。縮限された何性の下降は、(2)の「形相」の下降のことであり、絶対的な何性の下降は、(3)の「結合」の下降のことである。

以上で、どのようにして神の知性から事物が展開するか、が解明されたわけであるが、こうして展開した事物は縮限の度を減じて上昇することによって神のうちに包含される。数が、数の「始め (*principium*)」であり「終り (*finis*)」であるところの一性(数の原理)のうちに包含され、それを介して無限に上昇して絶対的な一性のうちに包含されるように、事物は「万物における縮限された原理 (*in omnibus principium contractum*)」Ⅱ, 4; 73, 17」であり「諸事物の縮限された究極目的 (*contractus finis rerum*) *ibid.*」であるところの宇宙のうちに包含され、それを介して無限に上昇して神のうちに包含される。この際の無限な上昇もまた、展開の際の無限な下降に要し媒介すなわち「神であって人間であるもの」を要する。それは、*Verbum* の受肉である神人キリストゥスである。万物は、キリストゥスを介して神のうちに包含され、神によって統御される。展開は創造の知解であり、包含は摂理の知解である。したがって、包含は終末論的な色彩をおびてくる。万物はいつかは生成消滅の停止に到達する。そのとき、すべての人間は、キリストゥスによって復活し、聖なる人たちはかれと一体となって神に包含される。そのとき、人間以外のものもすべて、「小宇宙」である人間の復活を介して神に包含される。

註

(1) De Docta Ignorantia, Liber II, Cap. 13, p. 110, l. 23~26. 以後 II,

13; 110, 23~26と略記する。テキストは Nicolai de Cusa DE DOCTA IGNORANTIA, Ediderunt Ernestus Hoffmann et Raymunds Klibansky, Lipsiae, In Aedibus Felicis Meiner, 1932 を使用した。

- (2), (3), (4) 以後 n.a.r., n.i.r., n.p.r. と略記する。
- (5) I, 5; 12, 6~8
- (6) 「数の上昇は現実には有限であり、可能態において他のもの（自分を超える他の数）に向っている」 I, 5; 12, 12~13
- (7) 「かりに数において上昇することによって『最大なもの』に現実に到達したとしても、数は有限であるゆえに、『それよりも大きな数が存在しえないような最大のもの』に到達したことにはならない。なぜなら、この数（それよりも大きな数が存在しえないような最大のもの）は無限な数であるから。 I, 5; 12, 9~12
- (8) 「数の場合や連続的なものの分割の場合には、確かに、『無限なもの』への移行が生じない」 II, 1; 63, 25~26
- (9), 10 I, 5; 12, 22~23
- (11) この根本命題は次のようにして証明される。
- (i) 量的な領域においては、円周は、その曲度が小になるにつれて直線に近づくが、直線になることはできない、ちょうど、三角形の角が、二直角へと限りなく接近するが、二直角にはなりえないように^{*}。そこで、この関係を非量的な領域へと移すと、そこでは、円周は直線になることができる。そのとき、円周は、「最小度に曲なもの」と同時に「最大度に直なもの」である。それゆえ、「最小なもの」は「最大なもの」と一致する。 I, 13; 26, 3~20 * I, 14; 28, 16~18
- (ii) 「最大な量は最大度に大きな量であり、最小な量は最大度に小さな量である。そこで『最大な（最大度に大きな）』と『最小な（最大度に小さな）』とを量一般から解き離してみたまえ、——知性的に『大きな』と『小さな』とを引き抜きながら——、そうすれば、あなたは『最大な』と『最小な』とが一致することを明らかに認識するであろう、なぜなら『最小な』が（比較法の）最上級であるように、『最大な』も最上級であるから」 I, 4; 10, 18~22
- (12) 「われわれが数多くの事物を『共通な一なもの』との関連において個別的に知解することによって、われわれの精神から数が生まれる」 II, 3; 70,

20~21

- (13) 「あの無限な一性は、線と量との究極であり完全性であり全体性であるところの点であり、この点はその一性（数の原理）を包含している」II, 3; 69, 18~20
- (14) I, 5; 12, 3~4
- (15) 「第一の一性」は「絶対的な一性 (unitas absoluta)」II, 6; 79, 5 「第一の絶対的な単純な一性 (prima absoluta unitas simplex)」II, 6; 79, 5 「まったく絶対的な普遍的なもの (universale penitus absolutum)」II, 6; 80, 23~24 「絶対的な最大性 (maximitas absoluta)」II, 8; 89, 15 と呼ばれる。
- (16) 「第二の一性」は「普遍 (宇宙 universum)」II, 6; 79, 8, 「縮限された普遍 (universum contractum)」II, 7; 82, 10, 「宇宙の一性 (unitas universi)」II, 6; 79, 5, 「縮限された最大な一性 (unitas maxima contracta)」II, 7; 81, 21, 「縮限された最大なものであるところの一なる総体 (una universitas quae est maximum contractum)」II, 7; 84, 10, 「縮限された最大性 (maximitas contracta)」II, 8; 89, 11 と呼ばれている。
- (17) 「いわば平方数が第三の一性として生じる」II, 6; 79, 15~16
- (18) 「いわば立方数が最後のすなわち第四の一性として生じる」II, 6; 79, 16~17
- (19) 個物は、「個別的なもの (singulare)」II, 6; 80, 10, 「特殊なもの (particulare)」II, 6; 79, 20 と呼ばれる。
- (20) 第一, 第二, 第三の三つの段階については, III, 3; 129, 2~8
- (21) III, 3; 126, 18~127, 6 (22) III, 3; 129, 12~14 (23) II, 6; 80, 11~15
- (24) 「絶対的に最大であるところの神的な本性が, 縮小されて, 有限で縮限された本性へと移行するようなことにはなりえない」III, 1; 119, 24~26
- (25) 「普遍的なものどもは, そこでは (知性の領域にあっては) 知性にほかならないのであり, したがって, 知性的な仕方でも縮限されて存在している, そして, 知性のおこなう知解は, ……普遍的 (宇宙的) なものどもが縮限されていることを, それ自身 (知性自身の領域) と他のものども (諸事物の領域) において把握する」II, 6; 80, 26~29
- (26) 「普遍 (宇宙) のあの一性は, すべての事物の縮限された原理として, すべての事物のうちに存在する」II, 6; 79, 12~13
- (27) 「絶対的な可能性は, 神のうちに神として存在する」II, 8; 88, 2.